

# SCHWARZSCHILD BH摂動 と準固有振動

T.Regge&Wheeler Phys.Rev.108,1063-1069(1957)

S.Chandrasekhar Proc.R.Soc.Lond.A.344,441-452(1975) のレビュー

大阪市立大学

あらき あやと

宇宙・重力研究室 M1

荒木彩人

## 目次

1. イントロダクション
2. Schwarzschild BH摂動
3. 準固有振動
4. まとめ

---

# イントロダクション

# ブラックホール摂動

摂動で考える現象

ブラックホール (BH) に物質が落ち込む



時空が変化



重力波を放出しエネルギーが散逸

安定なBHに落ち着く

この過程に注目

BH 強重力により光さえ抜け出せない領域

重力波 時間的に変化する時空の歪みが波となって伝わっていく現象

# BH準固有振動

BH時空の時間変化において、重力波によりエネルギーが外部に散逸して減衰振動となるもの

特徴

- ・ 振動数が複素数
- ・ 振動数の虚部が負

重力波の典型的な減衰時間は

$$\tau[s] \approx 5 \times 10^{-6} \frac{m}{m_{\odot}}$$

$m_{\odot}$  : 太陽質量

$m$  : BH質量

重力波によりBH質量を推察できる！  
Schwarzschildで実際に計算してみる



---

# SCHWARZSCHILD BH振動

# SCHWARZSCHILD計量と摂動

Schwarzschild計量の特徴

真空解

静的

球対称

$$ds^2 = -\Delta dt^2 + \Delta^{-1} dr^2 + r^2 (d\theta^2 + \sin^2 \theta d\varphi^2)$$

$$= \bar{g}_{\mu\nu} dx^\mu dx^\nu \quad \Delta = 1 - \frac{2m}{r}$$

摂動が加わった時空を考える

$$g_{\mu\nu} = \bar{g}_{\mu\nu} + h_{\mu\nu} \quad (|\bar{g}_{\mu\nu}| \gg |h_{\mu\nu}|)$$

真空において解く方程式は

$$R_{\mu\nu} = \cancel{\bar{R}_{\mu\nu}} + \delta R_{\mu\nu} = 0$$

# 方程式の解き方

解く方程式：4変数偏微分方程式

背景時空の対称性とゲージ自由度を用いる

- ・ 球面調和展開  $\theta, \varphi$  の分離、Odd・Even分解
- ・ フーリエ展開  $t$  の分離
- ・ ゲージ固定（RWゲージ） 変数の消去

以上の操作を行うことで

解く方程式：1変数常微分方程式

解くことができる！

# 求める解の形

求める解の形は (oddの場合)

$$h_{\mu\nu}^{odd} = \begin{pmatrix} 0 & 0 & 0 & h_0(r) \\ 0 & 0 & 0 & h_1(r) \\ 0 & 0 & 0 & 0 \\ h_0 & h_1 & 0 & 0 \end{pmatrix} \sin \theta \partial_\theta P_L(\cos \theta) e^{-ikt}$$

$P_L(\cos \theta)$  : ルジャンドル多項式



# 摂動の結果

先の  $h_{\mu\nu}^{odd}$  について各々の  $L$  で方程式を解いてやると

$L=0 \Rightarrow$  摂動ゼロ (Schwarzschild BHから変化なし)

$L=1 \Rightarrow$  Kerr BH (slow rotation)

$L \geq 2$  の時は次の方程式に従う

$$\frac{d^2}{dr_*^2} Q + (k^2 - V)Q = 0, \quad \frac{d}{dr_*} = \Delta \frac{d}{dr}$$

$$V = \frac{L(L+1)}{r^2} \Delta + \frac{6m}{r^3} \Delta, \quad Q = \Delta \frac{h_1}{r}$$

Schwarzschild BH の摂動が従う方程式がわかった！

---

# 準固有振動

# 解の級数展開と境界条件

$$\frac{d^2}{dr_*^2} Q + (k^2 - V)Q = 0$$

解を級数展開の形でおく

$$Q = e^{ikr_*} \sum_{j=0}^{\infty} a_j \Delta^{n+j} \quad r_* = r + 2m \log\left(\frac{r}{2m} - 1\right)$$

また、境界条件として

$$\begin{array}{lll} r \rightarrow \infty & \text{で外向きの波} & Q \sim e^{ikr_*} \\ r \rightarrow 2m & \text{で内向きの波} & Q \sim e^{-ikr_*} \end{array}$$

# 連分数

$\Delta$  の冪ごとの係数条件式より連分数が得られる

$$0 = \beta_0 + \frac{\alpha_0 \gamma_1}{\beta_1 + \frac{\alpha_1 \gamma_2}{\beta_2 + \dots}} \quad s = -2imk$$

$$\alpha_j = j^2 + (2s + 2)j + 2s + 1$$

$$\beta_j = -\{2j^2 + (8s + 2)j + 8s^2 + 4s - 3 + L(L + 1)\}$$

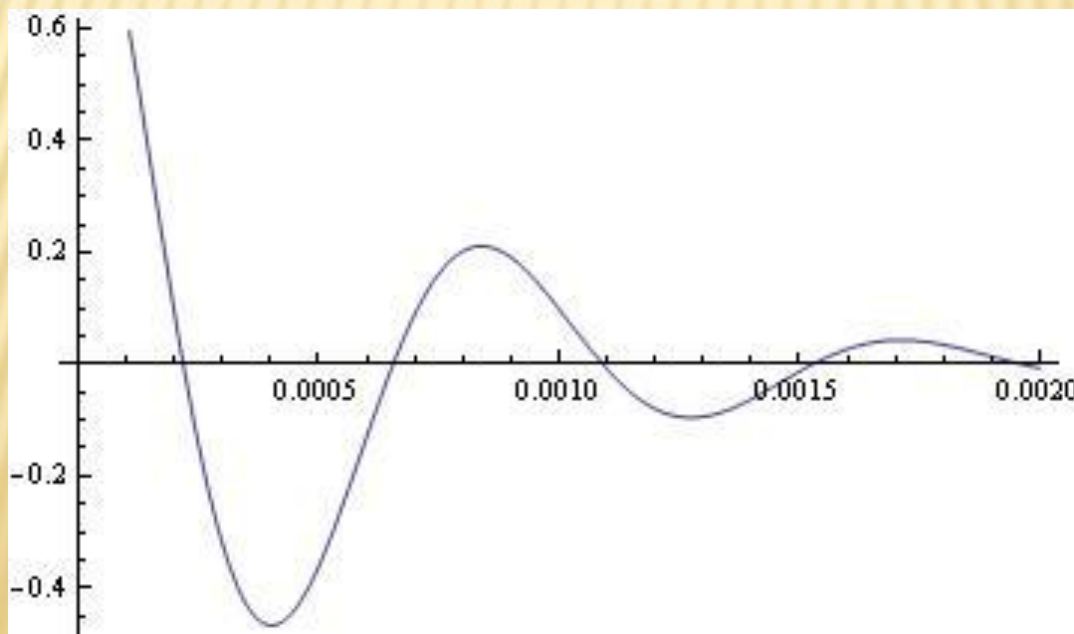
$$\gamma_j = j^2 + 4sj + 4s^2 - 4$$

$L$  をパラメーターとし、 $s$  を数値計算で求める



# 数値計算

L	j=2でのsをi/2倍したもの (=mk)		
L=2	0.37323 - 0.08746 i	0.33126 - 0.26986 i	
L=3	0.59940 - 0.09262 i	0.58098 - 0.28093 i	0.54166 - 0.48348 i
L=4	0.54166 - 0.48348 i	0.79593 - 0.28334 i	0.76396 - 0.47706 i
	0.70445 - 0.68750 i		



L=2  
縦 振幅  
横 時間[秒]

# まとめ

---

- Schwarzschild BHの摂動は波動方程式に従う
- 波動方程式には準固有振動が存在
- 振動数は複素数であり、BH特有のパラメーターに依存